

江前掲書)。

ワシントン会議からわづか四年、国家としての支那に対する列国の信頼が、すでに急速に動揺し、崩れつつあったことを、上記の諸事実が示してゐると云へよう。ワシントン会議の精神と理想は、はつきりと挫折したのであつた。前記の如く、関税会議に於て日本は率先して支那の関税自主権回復の要求を支持した。これが少なくとも一時的には、支那の対日感情を好転せしめたことは事実である。そして、関税自主権承認の決議が、その後支那が、米華協定(一九二八年七月二十五日)をはじめ、その他の諸国とも関税自主権承認の協定を締結し得る気運を促進する出発点となつたことも間違ひない。これは幣原外交を象徴するものであらう。

しかしながら、斯くの如き日本の対支親善外交は、決してそれにふさはしい報いを支那から得ることはできなかつた。関税会議の翌年一九二七年に入るや、日本は南京・漢口両事件の如く、暴力的排日運動と云ふ形で、赤色支那から返礼を受けることになるのである。

第一節 混迷支那へ赤い爪牙

孫文と中国革命同盟会

支那の国父と称される孫文は、一八九四年（明治二十七年）二十八歳の時、ハワイに於て、清朝打倒と外国勢力の駆逐を目的として、秘密結社興中会を設立した。翌一八九五年、日清戦争で清国が敗北すると、孫文は革命の好機到来として、広州拳兵を計画したが失敗し、日本に亡命した。

日清戦争に於ける清の敗北は、日本は何故に強いかの問題を支那に投げかけたのであり、それは結局、明治維新を通じての日本近代化の意義を支那有力人士に痛感せしめることになった。日本の明治維新を支那に再現せんとする「変法自強運動」は、かくして日清戦争を転機として支那全土に展開された。この革新風潮の中心となったのが、康有為・梁啓超の指導する「保国会」の改革運動である。明治維新を範とするこの改革運動は一八九八年、光緒帝の下に始つたが、西太后のクーデター（戊戌政変）のため百日間で壊滅し去つた。「百日維新」（六月十一日―九月二十一日）と云ふ。康・梁は危地を脱し、日本に亡命した。

一九〇〇年義和団事件発生するや、孫文は第二回目の拳兵——惠州事件——を決行したが、これも武器の不足と計画の粗漏のため失敗した。彼はいつたん日本に亡命した後、欧米に赴き、一九〇五年（明治三十八年）七月、日露戦争の勝利が決定的となつた時期の日本に戻つてきた。そして彼の興中会をはじめとする三つの革命組織の大同団結に成功し、同年八月二十日、東京・赤坂に於て「中国革命同盟会」が成立した。この成立大会には、留学生

（当時在日支那学生は八千人）の居ない甘肅省を除く支那十七省の代表者数百名が列席加盟し、孫文を首領に、黃興を副首領に押し、党の綱領には孫文の三民主義を採用したのである。

その後、同盟会の指導した拳兵はいづれも失敗したが、遂に一九一一年辛亥の年、鉄道国有化問題に端を発して四川省に動乱が起こり、十月十日武昌に於て革命軍が挙兵した。「武昌起義」と云ふ。滅満興漢をスローガンとする武漢革命の嵐は瞬く間に全国を蔽ひ尽し、一カ月を出でずして独立宣言を発するもの十余省の多きに達した。

辛亥革命とその後の混乱

清廷は事態收拾を、河南に追放中の袁世凱に依頼した。しばらく形成観望の後、袁は北京に入つて内閣を組織し、財力と兵力の大によつて北京に君臨した。この間、武昌起義の成功の報を米国で受取つた孫文は、歐洲を経て十二月下旬帰国、翌一九二二年一月一日南京に於て中華民國臨時大總統に就任、又この日を以て中華民國元年一月一日と定めた。やがて孫・袁の直接交渉で、袁は共和制に賛成すると共に清朝を退位せしめることに同意、孫は交換条件として大總統の地位を袁に譲ること、及び清皇室の優待条件に同意した。この妥協の結果、二月十二日遂に清朝第十二世の宣統帝溥儀（当時七歳）の退位となり、大清帝国は大祖努爾哈赤の建国（一六一六年）以来二百九十六年、入関（一六四四年）以来二百六十八年にして滅亡したのである。

かくして袁は北京で臨時大總統に就任、内閣を組織し、政局の中心を南京から北京に移した。革命派は宋教仁統率の下に国民党を組織し、袁に対する議会闘争を準備した。翌民国二年（一九一三年）二月の総選挙で国民党は大勝したが、袁は武力による弾圧に乗出し、先づ国民党の事実上の首領たる宋教仁を暗殺した。又四月に第一次国会が召集されたが、袁は国会の協賛を経ずに五カ国借款団より二五〇〇万ポンドの巨資を借入れたため、袁と議会は決定的に対立、袁は武力を背景に国民党切崩しに着手した。かくては国民党も南支に拠つて討袁の兵を挙げたが、

勢力が微弱で忽ち敗亡し（第二革命）、孫文・黄興は日本に、汪精衛はフランスに亡命の客となつた。国民党も四分五裂となり、多くの同志が続々と日本に集まつた。再び討袁運動を展開すべく、翌民国三年七月、孫文は東京に於て「中国革命党」を結成した。

民国四年（一九一五年）、袁の帝制実施の野望が露骨になるや、先づ雲南に討袁の師が起り、その勢ひは忽ち長江以南を風靡した（第三革命）。さしもの袁も帝制延期を宣言するのやむなきに至り、翌五年六月閩々の裡に波瀾重畳の生を終へたのである。

だが、袁の死後も北京の情勢は些かも改善されず、国法と国会は無視され続けた（この間、一九一七年七月には張勳による宣統復辟運動があり、再び君主制が行なはれたが、この清帝復辟劇は僅か十二日間で幕を閉じたのである）。この様な情勢の中で、孫文と革命派は広東に集まり、民国六年（一九一七年）八月、非常特別国会を開き、軍政府組織を議決して孫文を大元帥に選出し、護法（憲法擁護）の旗印の下に第一回広東政府が成立した。

ここに南北両政府ははつきりと分立したのであるが、諸外国の外交機関は依然として北京にのみ設置され、南方政府には承認が与へられなかつた。そして、この南方政府も北京政府と同じく軍閥・派閥が入り乱れて暗闘を続けることになるのである。これが辛亥革命後の支那共和国の姿なのであつた。明治天皇の下に大政を奉還し、三百年の幕藩体制を終熄せしめて近代国家建設に成功した我が日本との大きな懸隔がここにあつた。革命とは名ばかり、軍閥の私闘と混乱の打続く新生支那の壊乱した土壌こそ、やがて共産主義が成長してゆく絶好の温床となつてゆくのは必然の運命なのであつた。

コミンテルン（第三インター）の結成

ロシア革命で出現したソヴィエト政権の異常なる性格は、他国政府覆滅によつて共産主義を拡大させることを第

一義の使命とする点にあり、我国をはじめ諸国がソヴィエト・ロシア（赤露）を危険視したのもこの理由からだつた。革命は先づドイツに波及し、一九一八年十一月十一日連合国とドイツとの間に休戦条約が結ばれるや、十二月、スバルタクス団を基礎にドイツ共産党が結成され、翌一九一九年一月、スバルタクス団は暴動を起したが、指導者のカール・リープクネヒトとローザ・ルクセンブルグは惨殺され、共産革命の企ては全く失敗した。

しかしながら、一九一八年中に多数の国家で共産党が創設され、一九一九年三月、モスクワで開かれた各国共産党と社会党左派の代表者大会は、レーニンとボルシェビキの發議に従つて、共産主義インターナショナル Communist International 略称コミンテルン Comintern（第三インターナショナルとも云ふ）を創つた。レーニンは、ボルシェビキの指導の下にボルシェビキと全く同一の組織・戦術をもつた世界革命組織をつくり上げることを考へたのであつた。レーニンは第三インターにボルシェビキと全く同一の組織を与へ、単一綱領を採用せしめた。その綱領は一九二〇年七月の第二回大会で採択された。

第三インターに加盟する各国共産党は二十一カ条の綱領を承認することを絶対的な必要条件とされ、特に暴力革命とプロレタリアート独裁は不可欠の政策とされた（第一条）。一切の改良主義、中央派、換言すればボルシェビキの戦術と戦術に反対するものは全く除外され（第二条）、合法組織の外に暴力革命に備へて非合法組織の結成が要求された（第三条）。更に軍隊内に於ける宣伝（第四条）、農民の獲得について規定した（第五条）。

かくて成立した第三インターナショナルは形式的には各国共産党の国際組織であつたが、実質的には、ボルシェビキの指導と制圧の下におかれ、ボルシェビキは第三インターを通して各国共産党を自己の支部とすることになつた。その明らかな証跡として綱領第十六条は次の如く云ふ。「各国共産党は第三インターナショナルの大会及び中央執行委員会は一切の決議を無条件に実行しなければならぬ。また各国共産黨員は、ソヴィエト共和国の反革命と干渉に対する闘争を、献身的に支持せねばならない。」（尾上正男「ソヴィエト外交史」）。かくしてボルシェビキは、ソヴィエト政権と第三インターといふ全く表裏一体の二つの組織、二つの武器を手に、世界赤化に着手するこ

とになったのである。

カラハン宣言——赤い微笑外交

ドイツの共産化に失敗したボルシエビキが目を東方に転じた時、辛亥革命發展せず、また折も折、五・四運動の嵐吹き荒れる支那が在った。ソヴィエト共産主義者達は、共産革命の狙ひを支那に定めたのである。支那に接近し、支那を籠絡するためにソ連が用ゐた手段は、第一次及び第二次の所謂「カラハン宣言」と云ふ甘言であつた（カラハンは当時、ソヴィエト政府の外務人民委員代理）。

「中国国民及び中国南北両政府に告ぐ。……労働政府はここに日本、中国及び旧同盟諸国と結んだ一切の秘密条約の無効なることを宣言する。……『ソヴィエト』政府は中国政府に対し一八九六年の条約、一九〇一年の北京議定書並びに一九〇七年から一九一六年までに日本と結んだ一切の協約を廃棄する目的を以て協議に入らんことを求むるものである。……我々がここに中国々民に呼びかけるわけは『ソヴィエト』政府は満洲その他の領土を中国から奪つた『ツアー』の政府の行なつた征服物一切を放棄したことを十分中国人に理解せしめんがためである。これら領土の住民は彼等が自国に於て採用せんとする政治形態のみならず、何れの国に所属することを欲するかも決定すべきである。『ソヴィエト』政府は何らの補償も求めずして、東支鉄道、鉱山、森林、金鉱その他『ツアー』の政府、『ケレンスキー』の政府、『ホルワツト』、『セメノフ』、『コルチャツク』などの強盗及びロシアの前將軍たち、商人、資本家が中国の国民から奪つた物一切を中国々民に返還する。『ソヴィエト』政府はまた、一九〇〇年の団匪の反乱に基づき中国の支払ふ賠償金を放棄する。……もし中国々民にしてロシア国民の例にならひ、自由の身となり、かつ中国をして第二の朝鮮または第二のインドたらしめんとする『ベルサイユ』に集つた同盟諸国の指定した運命から脱却せんと欲するならば、その自由のために奮闘することに対してはロシア

の農民、労働者及び赤軍以外に同盟国となり、同盟となるものないことを理解すべきである。よつて『ソヴィエト』政府はここに中国々民に対し、今日以後我々と何らかの公式の關係を樹立するために、我が赤軍の前面に幾人かの代表を送られんことを提議するものである」

対支友好を謳ひ上げたこの第一次カラハン宣言（一九一九年七月二十五日）は、ソ連がアジアで試みた最初の微笑外交であつた。阿片戦争以来八十年の間、列強の強圧と浸食を受け続けてきた支那国民にとつて、この一片のカラハン宣言は甘美な福音の如く聞えたであらう。折から支那は、五・四運動以後のナシヨナリズム運動の大きな狂瀾の中にあつた。ソ連の甘い囁きと巧みな誘ひが、火に油を注ぐが如く支那民族主義と排外運動を煽り、支那国民の親ソ感情を燃え立たせたことは間違ひないことであつた。

続いて翌一九二〇年、ソ連は第二回コミンテルン大会（七月）で世界赤化政策の強化を決めた後、九月には臆面もなく第二次カラハン宣言を北京政府に対して発表した。

その要旨は次の通り。

(一) ロシア社会主義連合「ソヴィエト」共和国政府は、従前のロシア政府が中国と結んだ一切の条約の無効なることを宣言し、中国の領土にして奪取したものの全部並びに中国に於けるロシアの居留地全部を廃棄し、その他「ツアー」の政府及びロシアのブルジョアジーが中国から強奪的に略取した一切のものを何らの補償なく、かつ永久にこれを中国に還付す。

(二) 中国に在住する一切のロシア市民は中国共和国の領土内に行なはるる一切の法律及び規則に服従し、治外法権の権利を享有することなし。ロシアに居住する中国市民は「ソヴィエト」共和国内の領土に行なはるる一切の法律及び規則に服従するものとす。

(三) 中ソ両国政府は東支鉄道の運行に関し、「ソヴィエト」共和国の必要を適當に尊重して特別条約を結ぶことに同意す。

欺瞞だった宣言

この二度にわたるカラハン宣言は「糖衣をまとった毒薬」でしかなかった。例へば、第一次カラハン宣言の云ふ「東支鉄道の無償返還」は第二次宣言では早くも引込められ、「ソ連の必要を尊重して特別条約を結ぶ」と書きかへられてしまつてゐたのである。宣言の最も重要なポイントである領土問題を見るに、帝政ロシアがかつて愛瑾^{アイグン}条約（一八五八年）、北京条約（一八六〇年）で武力を背景に支那から奪取した広大なアムール地方と沿海州を、ソ連は今日に至るまで一平方センチも返還してゐない。

また東支鉄道に至つては、一九三五年（昭和十年）、ソ連はこれを満洲国に譲渡した。その後、第二次大戦末期、ヤルタの秘密協定に於て、「東清（＝東支）鉄道及び大連に出口を提供する南満洲鉄道は、中ソ合弁会社を設立して共同に運営する。但し、ソヴィエト連邦の優先的利益は保障し」云々として、東支鉄道のみならず南満洲鉄道についてまで再び特権を要求した。因に、ヤルタ密約の中でソ連は、海軍基地としての旅順口の租借権の回復も要求したのである。もし連合国の対日戦争が、支那の主権を守るための正義の戦ひであつたとするならば、支那に於けるソ連の特権と領土租借権の回復を約したヤルタの密約は、その戦争の意味と正当性をゼロにしたと云つてよいだらう。否、そもそも、対日戦争が、はじめから明確な国際正義に立脚した戦ひではなかつたが故に、上の如き競争目的の転倒と矛盾が終局に於て露呈したと云ふべきかもしれない。

ともかく、カラハン宣言は、友好のゼスチュアによつて支那の対露不信を取り除き、やがて全支那を赤化するための欺瞞にみちた手口でしかなかつた。支那の一部指導者、深き思慮を欠いた知識人と学生達がこれを盲信歓迎し、急速にソ連に傾倒し、やがて自分の国の共産化を許してゆく様は、その後の支那と極東の歴史を知る者の胸に、限りもなく深い悲哀の感を催^{もよほ}さずには居ないのである。

ソ連の支那共産化工作は着々と進み、一九二二年七月、上海フランス租界に於て中国共産党の成立大会である第一次全国代表大会が開かれた。出席者は七地区代表十三名であつた。尤も当時の党員は全部で三十余人、一説では六十余人にすぎず、「代表大会」とはいへ、支那国民からは全く疎外された少数グループの密会に過ぎなかつた。代表には李達（上海）、陳公博（広東）、董必武（武漢）、毛沢東（湖南）、周仏海（在日本代表）などが名を連ね、張國燾（北京）が大会主席であつた。コミンテルン代表としてマーリンとポイチンスキーが出席、意の儘に大会を「指導」した。かくして中国共産党（中共）が成立、第三インターナショナルに加盟した。

第二節 第一次国共合作

赤露、孫文へ接近す

その年の十二月、コミンテルンはアジア問題専門家であるオランダ人マーリンをして孫文と接触せしめた。マーリンは孫文の共産主義に対する警戒心を宥和せんとして、ソ連の新経済政策^{ネップ}NEPを例にあげて「ソ連は別に共産主義を實行してをらず、新しい経済政策をとることに改めた」と語つてソ連の政策の柔軟性を力説した。孫文はマーリンの言葉をその儘^{まま}信じ、ソ連の新経済政策に大きな興味を寄せた。新経済政策が、彼の民生主義に著しく接近してゐるとの印象と安心感を孫文に与へたことは、その結果から見ても、極めて重大なことであつた。

孫文とマーリン或いは共産主義者との間の決定的な世界観の相違を示す話が残つてゐる。マーリンが「あなたは何のために革命を行なふのですか」と尋ねると、孫文が「人を愛するが故に革命をするの